

「大人になれなかった弟たちに……」

七組 読んだ読んだ 第二場面



・母はやつとの思いで疎開先を決めた。戦争のことをあまり知らない「僕」は、これからの生活を楽しみにしていた。しかし、実際は、そんな暮らしではなく、今までで最も苦しい生活だった。

植木伯臣

・「僕」は、母が懸命に探した疎開先で、胸をはずませるほど楽しみにしていたが、実際は想像をはるかにこえる苦しい生活となることを、幼い「僕」はまだ分からなかった。

堀江芹奈

・知らない人に母が頼んで、やつとと疎開先が決まった。「僕」は、その疎開先を桃源郷と思い、楽しみにしていた。しかし、実際は「楽」なんて感じることは一切なかった。母も、着物を米と交換してまで必死で家族を守ろうとした。

江畑明優里

・「僕」は、これから始まる疎開生活が楽しいだろうと胸をはずませていた。しかし、実際は、配給もなく、とてもとても過酷な生活の始まりだった。それでも母は「僕」たち家族を守ろうと、自分を犠牲にし、がんばっていたのですごくいいなと思った。

三谷楓真

・やつとの思いで疎開先が決まった。「僕」は、これから始まる苦しい生活など考えもせず、心を弾ませ、楽しそうにしていた。でも、実際は、思っていた以上の苦しきで、母のすごさに感動した。

後藤佑希

・「僕」は今まで大変で辛い生活をしてきたので、疎開をすれば疎開先で楽しく暮らせると思っていた。しかし、実際は、思っていた生活とはほど遠く、ひもじくて、母に守ってもらってばかりで、恩返しなどはとてもできなかった。

柴田珠里

・「僕」は、疎開すればこれまでの苦しい思いをしなくてもいいと思い、とても楽な気持ちでいた。でも、実際は違った。食べ物もなく、母に楽もさせてやれなかった。でも、母は一生懸命働いてくれて、感謝の気持ちでいっぱいだった。

石田雪馬

・「僕」は疎開を楽しいものだと思っていたが、母は今から始まる生活にはとても不安を持っていた。母の思ったとおり、実際は苦しいもので、「僕」はまた母に苦しい思いをさせてしまったと悔やんだのだった。

竹中麻雄

・これからの生活を知らなかった「僕」は、母が苦勞して決めた疎開先に胸をはずませたり、母がこのあゆを食べたら喜んでくれるかなとか楽しみにしていた。しかし、実際は、学校でも孤独な生活を送り、食糧も十分にとれないことに不満を感じていた。

岩田 悠